

【秀句鑑賞】

橋桁に付きし貝殻夏きざす

友子

港や棧橋では有り触れた風景であるが、作者は橋桁の貝殻に夏の兆しを感じたのである。潮の満ち干に従って青い海面に浮き沈む貝殻の白さが目に沁みる。「貝殻白し」と言わずに「橋桁の貝殻」だけを提示したのである。句材の性状についての自己判断は述べてに、読み手の鑑賞に委ねたのが成功している。

【自句自解】

薔薇園や影の一つに亡命者

守

シーバスで山下公園の浮き棧橋に降り立った後、佳史さんから、山下公園が関東大震災に被災した中華街の瓦礫の埋め立てによって造成されたこと、山下公園の一部に入り込むように波止場が設けられたこと、その波止場の跡地に一段低い花壇広場が造成されたこと、この花壇広場は薔薇園となり、中華街に匿われていた孫文らも夕闇に紛れて浴衣姿で訪れていたことなどの説明があった。

掲句は、フィリピンの将軍や孫文を「亡命者」としてひとくくりし、救国の思いのもと捲土重来を期す孫文らに思いを馳せたものである。

【自句自解】

夏蝶の吹かれて風の港かな

守

山下公園の階段式噴水に向かうとき、横殴りの風に吹かれた夏の蝶が一瞬視界を過ぎた。まさに出会い頭の一句である。「風の港」が詠嘆過多ではないかとの指摘もあり得るが、如何ともし難い。

【秀句鑑賞】

一閃の紙飛行機や樟若葉

秀一

樟若葉が陽に輝く中を紙飛行機が一瞬にして視界を過ぎた。真っ白な一枚の紙で折った手製の紙飛行機、あるいは、本物の飛行機のような塗装を施した市販玩具の紙飛行機であるにせよ、若葉の輝きに飛ぶ紙飛行機の印象は鮮やかである。「一閃」の把握が巧み。

【自句自解】

白シャツを映して深き海の青 守

岸壁に釣り糸を垂れる人、釣果は如何にと覗き込む人。水面に映るシャツの白さによって、海の青さがより深く感じられた。

【秀句鑑賞】

夏桑にかこまれ裸婦像黝光る 佳史

シルクセンターの玄関前の情景。野の桑の木であるかのように熟れた桑の実を、童心に返って次々と口にいれる連衆。これを叱るともなく眺めているかのような裸婦像。年月を経たその像は雨に濡れて「くろひかり」していた。作者は、普通の「黒光り」という表記を採らず、「黝光る」という表記を当てた。この表記のこだわりが良く、「黝い」（あおぐろい）との把握が効いている。

【秀句鑑賞】

少年ら密談あとの水鉄砲 秀一

餓鬼大将の周りに自分の子供が集まり、こちらをちらちら見ながら、何かひそひそと話している。そのうち、一人の子供が水鉄砲を手に立ち上がり、水を放ち始めた。それだけのことであるが、このひそひそ話を「密談」と見立てたことが手柄である。密談は政治屋や政商に相応しい言葉であるが、このように「少年の密談」として使われると、「密談」のこれまでのイメージが壊れ、爽快なもののように感じられる。

【秀句鑑賞】

薔薇の門その紅のしじまかな 貞勝

掲句は不在投句の句であるが、偶然吟行地の情景と一致した。「薔薇の門の静寂」の把握には、共感する。

【秀句鑑賞】

大栈橋大佛次郎の Panama 帽 秀一

ヨコハマの港をこよなく愛した文豪がついさっきまでそこに居たかのような感じがする秀句である。「Panama 帽」が効いている。その人物のメルクマークとなるような品物を特定した段階で句は既に成功している。

【秀句鑑賞】

みらい都市のビルを映せる青葉潮 友子

吟行地がヨコハマ未来地区であるから、「未来都市」を詠みこんだ句が出て来ることは予想されたが、掲句は青葉潮に映っているビル影に焦点を当てることによって、一定の成功を収めた。よく使われる「映る」以外の言葉を探せば、さらに良くなるのでは。

【推敲提案句】

バラ園は昔の波止場霧笛鳴る 友子

薔薇園は昔の波止場日の暮るる

佳史さんの説明に触発された句であろうが、「薔薇園」は夏の季語であり、「霧笛」は秋の季語であるから、霧笛は鳴らさない方がよい。別の五音の言葉を入れて句の奥行きを積極的に出すか、あるいは、「日の暮るる」のようなあまり意味を持たない中立的な言葉を置くかにかしたい。

【秀句鑑賞】

薔薇咲いて葉のみどり色定めけり 秀一

ヤエ子さんの句評をお聞きして納得した。

絵に彩色するとき、モチーフとその背景の色のレベルは、両者の見合いで決まることの由。薔薇の花が咲いて、初めて葉の緑色のレベルを決定できるということか。

【秀句鑑賞】

鳩遊ぶニンフの肩や青葉照る ヤエ子

青葉の照る中にニンフ像が立ち、その肩に鳩が遊ぶ情景。鳩は実際に存在し、ニンフは架空の存在であるから、「ニンフ」は「ニンフ像」とするべきか。

【秀句鑑賞】

日時計の影一直線に夏の昼 佳史

夏の日を受けて影が一直線にくっきりと伸びていると断定することによって、日時計の実存が強く感じられる。

【秀句鑑賞】

五月の風はらんで回る風車かな ヤエ子

現実に見た風力発電の風車の翼は、細長い硬い金属製のものであり、ヨットの帆布

のように風を包み込むような柔らかい素材のものではない。しかし、「風はらむ」と真
正面から断定されると、そうだと肯定したくもなる。プロペラが「ゆっくり回る」様
子を「風はらむ」と見て取ったのであろうか。

【秀句鑑賞】

父と子の紙ヒコーキや風青し 友子

「風青し」の季語を選択することによって、若き父親と子が紙飛行機の遊びに興じ
ている様子がよく見て取れる。「一閃の紙飛行機・・・」が一瞬の時点を取えた句とす
れば、掲句は一定の時間を捉えたものと言える。

【秀句鑑賞】

大輪のバラ咲く幹の太さかな ヤエ子

大輪の花を咲かせるためには、養分が茎を通過して十分に供給されなければならぬ。
また、咲き開いた大輪の花の重さを支え、風に吹き飛ばされないようにするには、太
い茎が地面にしっかりと根付いていなければならない。単に薔薇の美しさを愛するの
ではなくて、作者の目はそれを支えるものに注がれているのである。

【自句自解】

紅薔薇やひとを愛すること難し 守

紅薔薇との関係で「ひとを愛すること」の意味を考えれば、異性間に成立する恋慕
の情を直感させるが、作者としては、戦争や武力衝突に流される血の赤をふと感じた。
「ひとを愛する」とは、男女の性とは無関係に、人間として人が人を愛すること、
すなわち人間愛・隣人愛である。人間としての共通性に信を置き、異質な点を互いに
認め合って生きれば、人が人を憎悪して合法的に殺し合う戦争や、先の見えない民族
間の対立もいずれ解消されるのと思う。今までにどれだけの血が流されて来たこと
か。

【秀句鑑賞】

窓ぬらす五月の波や遊覧船 秀一

喫水線の低い遊覧船ならばこそ客室の窓が波に濡れるのである。窓ガラスと海水の
界面において初夏の日の一部が反射し、一部が客室に差し込んで乗客の顔を照らす。
「五月の波」と言うことによって、陽の明るさと、遊覧船が軽快に波を切って進む様
子が感じとれる。

【秀句鑑賞】

楠若葉流れに遊ぶすずめたち

ヤエ子

楠若葉の輝きの中に水浴びをしている雀の様子が、平易な言葉で活写されている。

【自句自解】

港には港の時間ばら闌ける

守

潮の香の入り来る港の薔薇園。その薔薇の前に佇めば、時間は緩やかに流れていく。港にそれぞれの歴史があるように、人にもそれぞれの歴史があり、その二つの歴史の流れの交点に真っ赤な薔薇が咲いている。

【推敲提案句】

緑より伸ぶる 棧橋氷川丸

幸

公園の緑より突き出すように棧橋があり、氷川丸が係留されている。公園からの緑風に船が包み込まれているような句立てにすることができる。「客船の銅鑼」は「氷川丸」に集約したい。

【推敲提案句】

公園を日傘ゆっくり三人や

眞三

三人の日傘ゆっくり園真中

結語を「や」にした句は、なかなか成功するのが難しい。話題は何か知らないが、日傘の三人がゆっくりと園の真ん中にさしかかったような句にすることもできる。「園真中」は「えんまなか」と発音する。

【推敲提案句】

大掛声のカッターレースや満開のバラ

幸

主従の関係にないと思われる季語が二つある。「カッターレース」か「薔薇」の一方に焦点を絞りたい。

【推敲提案句】

木々多く公園抜ける若葉風

眞三

潮の香の入りし公園若葉風

眞三

「木々」と「若葉」が同質のものであるので、「木々」は消した方が良い。

【推敲提案句】

かけ声のボートレースや櫂重し 友子

追ひ上ぐるボートの櫂の重さかな 友子

この「かけ声」は、漕ぎ手のリズムを合わせるための合図の掛け声であろう。レース終盤、追い上げのために漕ぐピッチを速めよと指示しても、櫂の動きは重く、船脚は一向に伸びない。

このような状況の句であれば、右のような句立てにしたい。

【推敲提案句】

汽車道に夏衣の若者歌はずむ 幸

汽車道に歌はずみたる夏衣かな

歌うのは若者にあえて限定することもない。夏衣の人々が歌に弾んでいることを句にしたい。

【推敲提案句】

碑に斬髮令とあり夏木立 佳史

碑の斬髮令や夏木立

原句でも五七五に収められているが、「とあり」は少し説明的であろうか。また、「碑」は「ひ」の他に「いしぶみ」の読み方がある。そこで、「斬髮令とあり」は「斬髮令」のみとし、「や」の切れ字を入れたい。

【推敲提案句】

赤き薔薇柱に多く豪華なり 眞三

赤き薔薇あふれて支柱隠しをり

「豪華なり」と結論を言わないで、「豪華」と思わせるような場面設定をすれば良い。

【推敲提案句】

氷川丸観光役を夏に見る 眞三

初夏の海の光りや氷川丸

戦火を掻い潜って来た氷川丸は、今はヨコハマ観光の目玉の一つになっている。「氷川丸」と「夏」をどのように絡ませるかがポイントとなる。海に浮かんでいる氷川丸

だけでは平凡なので、その海に初夏の光りが反射していることを捉えて、「初夏の海の光り」としたい。

【推敲提案句】

青嵐風力発電緩慢に

佳史

緩慢に風力発電青嵐

強い風なのに緩慢に回っている風力発電のプロペラ。「緩」と「急」の対比を詠もうとした着眼は良いが、下五の「に」は避けた方が無難である。そこで、順序を入れ替えて見たい。

【推敲提案句】

一匹の蜂の水浴び水の階段

幸

蜂出づる水の階段三段目

「水浴び」は「水遊び」や「行水」とは微妙に異なり、季語にはなっていない。しかし、「水」浴び、「水」の階段と置いても、掲句では「水」の重語(リフレイン)の効果はあまりない。

「蜂」は春の季語ではあるが、吟行句会では囁目吟が認められるから、このままで良い。蜂が階段式噴水の水のカーテンを突き抜けて不意に出てきたことを詠みたいのであれば、階段の段数を意図的に特定し、例えば「三段目」としたい。

【推敲提案句】

陽を貯めて赤紫の桑の実二つ

幸

陽を貯めて桑の実二つ雨の中

「赤紫」は桑の実の熟れた状態を表すときに普通に用いられるもの。「陽を貯めて」の把握は良いので、これを生かし、熟れた桑の実が雨の中でも輝いている様子の句にしたい。

【推敲提案句】

初夏の陽を浴び快音のシーバスや 眞三

初夏の陽へシーバスの機動音

結語を「や」にした句は、なかなか成功するのが難しい。初夏の太陽に向かうようにシーバスが航行し、そのエンジン音が快適に響いている状況であれば、右のようにすることもできる。

【推敲提案句】

公園の風に遊ばるる棕櫚の花 佳史
公園の風遊ばせし棕櫚の花 佳史

中七の部分が八音になっているので、「風遊ばせし」として基本の七音に収めたい。「棕櫚の花」が目的語となるか「主語」になるかの違いでもある。

【推敲提案句】

五月初風のささやき聞いたなり ヤエ子
あかときの風のささやき五月かな

「朝に風のささやきを聞く」が眼目のようであるが、五月の朝風をさわやかに感じることが普通であり、また、音は聞くものであるから、「ささやき」を受けて「聞く」とするのは、字数が勿体なく思える。「聞く」は省略できる。また、「朝」よりも時間帯を前にずらせて、「あかとき（暁）」にすると、「ささやくような風」がもっと生きるのではないかと思う。

【不在投句中の秀句】

不在投句の句は、今日見たばかりの印象深い句材を盛り込んだ吟行句と比べて、互選上不利とならざるを得ないのであるが、次の諸句は注目される。

ハンカチの白にも確と裏表 貞勝
新緑や並み脚かるき調教馬 貞勝
青筋の浮き立つ仁王新樹光 貞勝
袈裟がけの生麦事件碑若葉寒 貞勝

文責・増田 守

会場・シルクセンター会議室

【事務局より】

六月十一日、十二日に開催される母校記念祭には、昨年と同様に桜蔭会のブースに桜蔭俳話会も出展します。